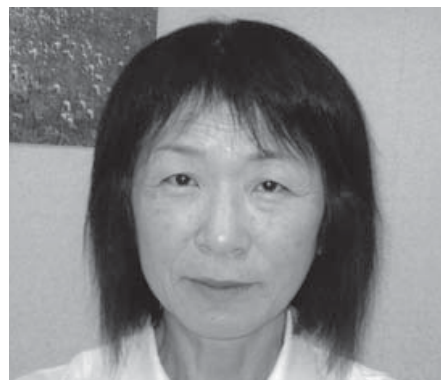


産業保健はサービス業 琴線に触れる対応に 腐心する日々



富士通セミコンダクター株式会社 三重工場 健康推進センター長 草川真弓さんに聞く

総合病院の臨床医（内科）を15年経験した後、草川真弓さんは12年前、富士通セミコンダクター三重工場の産業医に転身した。臨床医の前は、高校の英語の教師も経験するという、ちょっと珍しい経歴を持つ。「文学部出身の産業医は珍しいでしょ」と笑いながらの軽快でリズムカルな話し方に引き込まれることになる。こうした経験は、「すべて現在の仕事をするのに役立っていると思うのですよ」と語る。詳しくは後述することになるが、まずは同工場の概要から紹介することにしよう。

同工場は1984年、半導体デバイスの製造工場として現在の三重県桑名市多度町に設立された。当時の従業員の平均年齢は30歳に満たなかったが、現在のそれは41歳を超えた。着実に高齢化が進んでいるともいえる。全従業員が正社員で、エンジニアと製造に携わるオペレーターがほぼ半々の構成。オペレーターは夜勤を含む交替制勤務となっている。

こうした従業員の健康管理を預かる健康推進センターの陣容は、センター長を務める草川産業医のほか、産業看護職3人、事務方1人の5人体制となっている。「難題な要求にも積極的に協力してもらっていますから、スタッフに恵まれていますね」とスラリと語るが、積み上げた実績はスタッフ共々で苦労した結晶でもあるようだ。

ビジョンまとめ方向を打ち出す

草川さんは、着任後しばらくは、静観していた。工場の現状を認識することに専念していたわけだ。

ある時期を期して、方針を打ち出した。スタッフに考え方と必要性、その実施方法などを納得いくまで説明し、皆の共通認識として統一されての出発であった。そして、工場の経営陣をはじめ、関係担当課長などに、粘り強く対話を重ね、方針を理解してもらいながら、徐々に自分が描く産業保健活動を展開してきた。当初の経営陣の反応は、熱意のこもった提案には理解を示してくれるものの、予算の面から100%実現するまでには、遠かった。そして、「体制づくりの重要性を語り、必要なことは提案し、納得してもらうためのデータを示しながら、対話を重ねてきました。従業員の健康管理はリスクマネジメントであることも強調しました。今では、従業員の健康管理は全面的に任せてもらい、要求もスムーズに通うようになりました。経営陣は費用対効果をまず考えますから、しっかりしたデータを提示することにより、理解が得られやすいことを実感しました」とこれまでの変遷を語ってもらった。

着任当初は、健康診断などはきちんと実施されていたものの、「その後」が不十分であったようだ。そこで、「10年くらい前から慢性疾患他に関する全従業員のデータ整理をしています。それまでは手作業であったものをスタッフの協力を得てコンピュータ化しました。健診結果などは個別保存していても利用できなければ何ともなりません。産業保健統計を取るのには欠かせない取組でもありました」。「健診の受診率

は100%です。二次健診の受診率も高くなりました。内科医のプライドもありますが、仕事ですから、結果を出したかったですね」とも。

また同工場でもメンタルヘルスの問題は他人事ではない。相談員の設置、ストレス調査の実施、健康診断実施時の問診でのメンタルヘルス関係の質疑応答なども行ってきた。特に、残業時間の多い者や板挟みになりやすい管理職には毎月、問診票によるチェックも行われる。「腹痛を訴えて健康推進センターに来た従業員がいました。よくよく話を聞いてみると、原因はメンタルにありました。メンタルと身体症状は大いに関連しますから、内科医の経験が生きているともいえます。『眠れない』、『休もうかな』などと訴えてくる従業員もいます。親身になって対応し、個人情報を守りながらの職場への配慮の働きかけを行うことにより、問題化することなく解決に向かうことも多いです」。こうした結果、「メンタル休業率は全国工場の平均を大きく下回る」という。「休業率だけでなく、あらゆるデータで誇れる全国1の事業場にしたいと思っています。負けず嫌いなんです」。

信頼関係あれば胸襟開いてくれるもの

センターに気軽に足を運んでくれるのも、信頼関係があったればこそだともいう。「個人の情報は守りますし、何よりもセンターのスタッフはあなたの味方ですよとの思いを理解してもらうことが大切ですね。熱意は必要ですし、配慮、あの手この手の心くばり。これらがあれば胸襟を開いてくれます。こちらの気持ちは伝わります。信頼関係があれば、時には耳に痛いことをいっても、聞いてくれます。教師経験での実感と通じるものがあるという。

文学部の学生だった当時は、「ヘーゲル、カントを片手に夜通し友と語り合ったりしていました」。そして、教員の道へ。4年を経過した時、医学部に入り直した。そして臨床医に。「産業医になるまでに色々経験しましたが、回り道だとは思っていません。経験が生きているといえますし、自信にもなっています。本当は政治家になりたかったの」と笑う。草川さん自



健康センタースタッフ一同

身、大病を克服しての現在である。あらゆる経験は、従業員とのコミュニケーションを図るための抽斗（ひきだし）の多さにつながる。「職場のメンタルヘルスは難しいのは確かです。これは“魂の豊かさ”が薄らいできた結果のようにも思います。これを取り戻す作業も産業保健職の役目なのではないかとも思います」と、やや哲学的に思いを語ってくれる。

余談かもしれないが草川さんは、従業員の親の葬儀関連通知も要チェックするという。若くしての病死であれば、従業員に対しての健康教育に際して、遺伝性の話しをし、気を付けるように、それとなく諭すのだという。相手のためになることであれば、人がどういおうが信念を貫く勢いを感じる。

「臨床医は座っていても患者が来るが、産業医は大きなお世話屋さん。時には従業員にとって嫌なことをいわなければなりません、琴線に触れる心づかいで信頼関係は築けるものと考えて頑張っています」。臨床の現場で、“なぜもっと早くに”との現実を多く診てきたからいえる言葉かもしれない。

「産業保健はサービス業、心くばりが大切な仕事。産業保健は統計ありき。目標を立てて実施することを明確にし、統計・データを利用しての実践でなければ空回りしてしまいます。常に自身に言い聞かせて実践しています」。ホームページの作成も手がける徹底ぶりだ。

「全従業員の心身をサポートし、変わったな、良かったよといわれるようにとの思い」で臨床医から転身した草川産業医。確かな歩みを一番感じているのは、従業員1人ひとりではないか。